



環境経済論A

第9講

環境の経済評価②

仮想評価法CVM

- 環境経済評価手法
- 1 需要曲線アプローチ
- (1)CVM
 - Contingent Valuation Methods
- 仮想評価法
- → 1990年代に急速に普及

仮想評価法CVM

* CVM

→ 表明選好法, アンケートによる調査

→ アンケート自体のバイアスとCVM特有のバイアス

① 戦略バイアス

(回答者がアンケート実施者に迎合する回答をする)

② 部分全体バイアス

(ある部分の環境の評価ではなく, 環境全般の評価をしてしまう)

③ 支払い手段バイアス

(租税⇒基金への寄付)

④ 範囲バイアス

(自由回答方式⇒支払いカード方式⇒2項選択法)

仮想評価法CVM

- CVM
 - * 1990年代に普及。アメリカで、大西洋におけるタンカーの原油流出事故(エクソン社バルディーズ号原油流出事故)での裁判での損害賠償の根拠とされた。
 - 日本においても数多くの環境サービスの評価がなされた。
 - * 屋久島, 四万十川, 瀬戸内海沿岸, 釧路湿原, 琵琶湖など
 - * CVMによる評価額(WTP)は概ね, 1000円~2万円程度
 - → 妥当性? 正確性?
 - 後の講義において, CVMに対する論争について紹介する。

CVMに関する論争

* CVMのバイアス問題

... 環境政策そのものというより、質問方法の工夫・洗練化がCVM研究の中心となってしまった。

CVMの評価・意義付け

- 自然環境に関する価値観形成？
- 直接民主主義の一形態？
- 「正しい環境評価額」とは？社会的受入れ可能性が重要？
- 費用便益分析に利用できるほど確立した手法でない。
- 環境経済統合勘定(SEEA)での利用は理論的に矛盾する。

環境の経済評価と経済学における「価格」

- 新古典派：需要価格，供給価格，均衡価格
- 古典派：市場価格，自然価格（生産価格）
- 「公正価格」...「正しい価格」（アリストテレス『政治学』）
 - 古典派アプローチの「固有価格」，「自然価格」，「重心価格」

自然価格 Natural Price

ピエロ・スラッファ P.Sraffa